

## H. B. アダムスの大学拡張論

小池源吾

(1997年10月1日受理)

Herbert B. Adams : an Apostle of University Extension Movement in America

Gengo Koike

University extension originated in England in 1873. It was Herbert B. Adams (1850 ~ 1901) who introduced English University Extension in 1887 and proposed putting it into practice in the United States. Thus he has been recognized "the father of university extension movement in America".

As the associate professor of Johns Hopkins University, he was also one of the best historio-graphers, playing an active part in the organization of the American Historical Association.

The History of university extension suggests that public service function of university has often conflicted with academism on campus. Viewed in this light, it is interesting to guess how Adams, as a resercher, bore university extension in mind.

This paper aims to inquire Adams' idea and scheme on university extension and clarify the features and limitations in early University Extension Movement of the United States.

This paper consists of following parts:

### Introduction

1. Acceptance of English University Extension
2. Leading Experiments of University Extension in America
3. Adams' Scheme on University Extension

### Conclusion

### はじめに

1880年代が終焉を迎えようとする時ですら、アメリカ人にとって「大学拡張」というタームは目新しいものであった。<sup>\*1</sup> これまで確認できたところでは、1880年代中葉に、イギリス大学拡張に通じていたと思われるアメリカ人は3人を数えるのみである。

そのうちのひとり、シャトーカの創始者であり、指導者でもあったヴィンセント(John H. Vincent)である。彼は、1880年と1886年の2度にわたって訪英し、大学拡張運動のめざましい発展を目の当たりにしている。<sup>\*2</sup> 二人目は、後にニューヨーク市立大学の総長に就任するマックラケン(H. M. MacCracken)で

ある。彼は、1884年に国際保健博覧会の一環としてロンドンで開催された教育会議に招かれ、自国にはイギリス大学拡張のようなスキームは存在しないこと、類似した事例をあえて挙げるとすればシャトーカシステムがそれにあたると陳述している。<sup>\*3</sup> しかし、合衆国における初期大学拡張運動への貢献という点で、当時ジョンズホプキンス大学の歴史学準教授であったアダムス(Herbert B. Adams)に比肩しうる人物はみあたらない。すなわちアダムスは、公的な場でいち早くイギリス大学拡張を紹介したばかりか、公共図書館を基盤にした拡張事業の普及に与って大いに力があつた。さらにニューヨーク州シャトーカ湖畔で毎夏開催される夏期学校への参与や、やがてフィラデルフィア

で結成をみる大学拡張協会の関係者との親交によってもたらされる広範な人脈は、アダムスをして初期大学拡張運動のキーパーソンたらしめることとなった。

ところで大学拡張が、正当な大学機能として認知され、定着をみる過程では、アカデミズムとの軋轢をいかに調停するかという問題に直面せねばならなかった。アメリカ大学史における19世紀後半が、ドイツ大学をモデルにしたユニヴァーシティへの転形期であったことを考えあわせると、大学拡張は大学の研究機能との間に容易ならざる葛藤を胚胎していたと考えてよい。とすれば、新進気鋭の学徒の例にもれず<sup>44</sup>、ドイツに留学しドイツ大学の洗礼を受けたアダムスが、しかも大学院教育の草分けとして自他ともに認めるジョンズホプキンス大学に在職する身分で、大学拡張をどのように捉えていたかは、興味をそそられる問題である。

そこで本稿では、アダムスに着目し、彼がイギリス大学拡張をどのように受容し、しかる後にどのような意図と構想をもって合衆国に導入しようとしたのかという問題について考察し、1890年代合衆国における初期大学拡張運動の特徴とそこに内在した限界をも究明しようとしている。

## イギリス大学拡張の受容

論稿が、それをものした人物の思惟の証しであるとすれば、アダムスの場合、存命中に執筆した長短合わせて110本の論稿が、思索の軌跡を辿る際のよすがとなる。それらを総覧したところ、約半数にあたる49本が彼の研究分野であるところの歴史とくにアメリカ社会制度史、および歴史学関係で占められる。しかし、興味深いことに、大学をはじめ教育に関する論説がすくなくとも数のうへでは研究分野のそれを凌駕する。はからずもこのことは、いかに彼が常日頃から教育問題に強い関心を寄せ、かつ深い造詣をもっていたかを証左している。

そのうち、「イギリスにおける大学拡張」と題する論文は、アメリカにおける大学拡張論の嚆矢と目される<sup>45</sup>。それは、もともと新聞社グループ発行の『フォード・ニュース』のために書きおろしたものであったが、『連邦教育長官年次報告書 1885~86 (Report of the Commissioner of Education for 1885-86)』(1887年)、そして『Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science』に転載された結果、衆目にふれ、広範な社会的影響力をもつことになる。

同論文は、次のような書き出しではじまる。

「イギリスには、民衆の高等教育 (higher education of the people) をめざす注目すべき運動がある。教育

は、政治と同様に、その基盤を拡大しつつある。かねてよりコモンスクールは自由な政体の柱石とみなされてきたとはいえ、封建的なイギリスであってみれば、上流階級による、高等教育の労働者階級への拡張は印象深い現象である。それは、参政権の拡大に似ている。イギリス大学の、昔からの排他性は解体しつつある。元氣な若者たちは、世界に広げるために、伝統的な奥まった場所や、藁のからまった壁でしめきられた中庭から颯爽と出かけ、高等教育に対する要求を認識し、科学の御旗を都市や鉱工業地区へともたらす。この新しい運動は、大学拡張と呼ばれる。」<sup>46</sup>

生氣溢れるその筆致から、「民衆の高等教育」を目指す斬新な運動が封建的な国イギリスで創始されたことに対するアダムス自身の驚嘆と感動が伝わってくる。とはいえ、彼は、大学拡張運動の生成を歴史における偶発的で特殊個別的な出来事とみなしていたわけではない。たとえば、労働者階級に高等教育を拡大しようとする運動を参政権の拡大になぞらえ、また別の箇所では「民主的な教育の使命」<sup>47</sup>と別称している点を想起するとよい。アダムスが、大学拡張を民主的な教育の理念から敷衍されるところの必然的な帰結と捉えていたことはおのずから明らかとなろう。。

さらにいうと、アダムスは、イギリスにおける大学拡張運動の発展構造を高等教育をめぐる需要と供給の関係から捕捉しようとした。たとえば高等教育に対する需要について、次のように述べている。

「イギリスでは、労働者階級と資本家階級の代表者たちは、大学が高等教育と呼ばれる商品を有している事実に気づいた。人びとは、イギリス史、政治経済学、社会科学、文学や芸術に関するすぐれた知識が社会全般の発展、および社会の構成員の間に好ましい感情の形成に役立つことを認識しはじめた。要求は、コモンスクールに対してではない。それらは、すでに満たされている。いま求められているのは、多忙なため継続的に学習することはできないが、ある程度の時間なら知的な向上に充てることができる成人有権者や、就学年齢が過ぎてしまった人びとのための高等教育なのである。」<sup>48</sup>

もともと、いくら民衆の側に高等教育に対する強い要求があったとしても、それだけでは大学拡張運動は成立しない。そこで、需要に対する供給側、つまり大学の姿態が問題となる。この点では、大学人のあいだに、教養は一部の者に占有されるべきではないとする認識が形成されてくるが必要であった。この「新しい形のヒューマニズム」<sup>49</sup>がイギリス大学に根づいてきたからこそ、十分な訓練を積んだ、熱心な若者を拡張講師として地方都市に派遣し、民衆の高等教育要

求を満たそうとする気運が醸成された、とアダムスは考える。

だが、大学拡張の理念や精神を称揚するあまり、ともすれば実際の問題が等閑視されることを彼は危惧した。そのため、論稿では、かなりの紙幅を實踐に関する説明に割き、とくに「事業としての側面」を強調する。たとえば「この運動の顕著な特徴は、その経済的な性格にある。この運動は、かならずしもすべてが伝道運動（missionary movement）とか教育の十字軍（educational crusade）というわけではない。」<sup>\*10</sup>と述べ、拡張講義が、大学からやってくる講師の慈善活動ではないことを明記している。他方、無料の講義は、「ただ飯」と同様、民衆にとっても好ましいことではないし、高等教育の伝統にもなじまないと主張したくんだり、アダムスの教育観がうかがわれて興味深い。

「ひとつのコースが終わると、新しい講師を雇って、別のコースが組織される。有能なスペシャリストは近隣の大学から確保することができるだろう。彼らには、実費のみならず、1講義につき10ないし20ドルが支払われる。当該地域の教会で行われる説教の料金表が、講師謝金の額を決める際の目安となろう。卓越せる人間（scientific men）に、ただで講義を依頼するのは、不当な要求である。さらに、無料の講義は、知的な面で、その地域を多かれ少なかれ貧しくしてきた。それは、ローマにおけるサーカスやただ飯と同様によくないことである。高等教育では、無料入場者（dead-heads）という習わしがあってはならない。返還義務のない奨学金や、貧困の度に応じた授業料、ただでものを支給することは学生の墮落を招くだけである。勿論、すべての教育が多かれ少なかれ慈善事業ではあるが、経済的な要因を無視してしまっただけではない。」<sup>\*11</sup>

無論、事業に要する経費の最大のものは講師謝金である。したがって、講師謝金を自前で確保できるかどうか、当該地域における大学拡張事業の成否を決することになる。それゆえ、アダムスは、事業が企図されてから実施にいたるまでの手続きを説明した中でも、地域の人びとが一丸となって準備にあたること、とりわけ財政的な問題に対して運営委員会は周到な措置を講ずべきことを訴えている。

「公共心に富む人びとは、現況と将来を考量しつつ、町や教区に拡張事業のための組織（educational societies or associations）<sup>\*12</sup>をつくってきた。彼らは、地方大学、インスティテュート、文学協会や哲学協会、教会関係の教育機関、メカニクス・インスティテュートといった、当該地域に現存する教育機関や団体と密接な関係をもつ。彼らは、意欲的な書記と小委員会——たいてい女性で構成される——を任命する。注文とりを行う若者

を確保する。教師たちと熟練工、資本家階級と労働者階級が一堂に会する。宗派や政治的立場に囚われることなく、人びとは、ひとつの教育的な目標で結び合わされる。市長とかそうした著名人が、その事業の名譽会長に据えられる。一口5ドルの寄付が募られると、ひとりで数口寄付をするものもいれば、共同で一口の寄付をするものもいるが、いずれも、代議権をもつ。コース受講券と各講義ごとの受講券がほどほどの値段で販売される。そのようにして財政基盤が確保されると、これらの組織は、連続講義コースに対するその地域の需要を大学に提示する。」<sup>\*13</sup>

最後にアダムスは、大学拡張の効用に言及して、それを3点に要約している。すなわち、

- (1) 安価なバラエティショーに墮してしまっているライシャムコースに代わり、高度で継続的な学習機会を民衆に保障することができる。
- (2) カレッジに基金を寄付したり、ユニヴァーシティを増設しなくとも、12講義からなる1コース開講に要する必要経費が325ドルであるから、毎年数百ドルですべての地域が「戸口まで届けられるユニヴァーシティシステム」を手に入れることができる。
- (3) 拡張事業は、先述したように当該地域における既存の教育機関との連携のもとに実施されることから、逆にそれら諸機関にも好影響を及ぼし、教育活動の強化に資することができる、と。

そして、大学拡張の思想を受け入れつつあるスコットランド、実践に着手しているオーストラリアの例をあげながら、「遅かれ早かれ、その思想は、アメリカでも普及するだろう。」<sup>\*14</sup>と予言する。このように、アダムスは、抽象論に走ることなく、実際の側面も視野におさめながら、イギリス大学拡張を具体的にかつ正確に記述することに努めている。その意図が、イギリスで開発せられた新奇な試みを紹介するだけでなく、大学拡張の合衆国での実施とその普及にあったことは想像するに難くない。

## アメリカにおける大学拡張の先導的試行

アダムスの願望が達成されるのは思いの外早く、1887年の冬には、イギリスモデルに倣った最初の大学拡張講義コースがバッファロー公共図書館において開講されている。講義を担当したのは、ジョンズホプキンス大学の大学院生ベミス（Edward W. Bemis）であった。この間の事情は、アメリカ図書館協会の年次大会に招聘されたアダムスの講演によって説明できるだろう。

アメリカ図書館協会の1887年度大会は、ニューヨーク州もカナダ国境に程近いサウザンドアイランドのひとつで9月6日から3日間にわたって開催された。アダムスによる基調講演の演題は「セミナー図書館」であった。彼は、まず留学時の体験をまじえながらドイツ大学における演習と図書館の密接な関係について紹介し、大学院教育にとって学術的な資料および専門図書的重要性を指摘する。そうしたドイツ大学の先例が、新進気鋭の学徒たちによって合衆国に導入されたことはつとに知られる。したがって講演でも、ミシガン、オハイオ、コーネル、ハーバード、イエール、コロンビア、そしてジョンズホプキンスといった大学を例にあげ、セミナー図書館の実践を紹介している。

このように大学図書館を論じてきた講演内容は、やがて後半に入ると公共図書館の課題へと一転する。ここでは、「民衆のためのセミナー図書館」という観点から、彼は、公共図書館の民衆大学（people's college）としての役割を提起する。すなわち公共図書館が「公立学校を卒業した人、就学年齢がすでに過ぎた人、職工や労働者階級など民衆の教育要求に積極的にかかわるべきこと、しかも「気まぐれな読書や公共図書館の個人的な利用」にまかせていたのでは「十分とはいえない」と述べ、公共図書館が、「適切なガイダンスのもとでの組織的で、継続的な学習」を提供する必要性を強調する。そして、それを具体化する方策として彼が提案したのが、すでにイギリスでいちじるしい成功をおさめてきた「大学拡張の方法」にほかならなかった。<sup>\*15</sup>

その趣旨に賛同し、大学人による連続講義の実施をいち早く企図した人物がバッファロー公共図書館長ラーニド（J. N. Larned）であり、彼から拡張講義の依頼を受けたアダムスが、講師として推薦したのがベミスというわけであった。ベミスは、経済の今日的問題を中心に、1887年12月5日から翌年の2月20日まで都合12回の連続講義を担当している。ちなみに各回の講義テーマは、次のようであった。<sup>\*16</sup>

- (1) 不満の原因
- (2) 社会主義と無政府状態
- (3) 地代税（rent taxation）に関するヘンリー・ジョージの理論
- (4) 独占
- (5) 独占
- (6) 移民
- (7) 教育
- (8) 労働法
- (9) 完全な競争状態のもとで賃金を決定するもの
- (10) 労働組合
- (11) 協同と利潤の配分

## (12) 合衆国における税

他方、ジョンズホプキンス大学の地元ボルチモア市でも、1887年の暮れに大学拡張の試みが始まる。「十九世紀の歴史」と題するコースが、教会の読書室を開放して実施されるにいたったのは、ガウチャー牧師（Rev. John F. Gaucher）の識見と指導によるところが大きい。しかし、参加者が自分たちでテキストを読み、討論するという旧態依然たる学習形態に代わって、十分に訓練された専門家による連続講義と討論の方式を採用すべく助言するとともに、大学院に在学する門下生アンドリウス（Charles M. Andrews）を拡張講師として斡旋したのは、アダムスであった。

同コースを開設するための準備作業に触発されて、さらにもうひとつ別のコースが企図されたことは、大学拡張をめぐる高揚する市民の熱気をうかがわせる。それは、拡張事業準備委員会にたまたま出席していた富裕な資本家が、アダムスの講演でもって大学拡張の概要を知ったことに端を発している。大手工場経営者の息子であるその人物は、早速、近隣の工場主たちの勧誘と説得にあたりるとともに、工場労働者を対象にした拡張事業の可能性をアダムスに打診したのであった。

依頼に対して、アダムスは、「労働者階級の発展」と題するコースで応えている。実施にあたっては、ジョンズホプキンス大学に籍をおく12人の講師がそれぞれ、ウッドベリーを皮切りに他の工場地区2か所を順次巡回して講義を提供する方式が用いられた。1888年の1月27日から4月18日まで実施された12講義のタイトルと講師は、以下のようである。<sup>\*17</sup>

- (1) 英米の労働者における教育運動（H.B. アダムス）
- (2) アメリカにおける労働者の要求（C.M. アンドリウス）
- (3) 社会主義、その長所と短所（E.P. スミス）
- (4) 中国人労働者と移民（R.W. ブラックマー）
- (5) 日本における国家の発展と労働者（T.K. イエナガ）
- (6) 古代ギリシャの奴隷労働（W.P. トレント）
- (7) 中世の労働者（J.M. ヴィンセント）
- (8) 中世のギルド（E.L. スティーブソン）
- (9) 百年前のアメリカにおける労働者と製造業（J.F. ジェイムソン）
- (10) 近代における産業の発展（H.B. ガードナー）
- (11) 実業教育（P.W. エアズ）
- (12) 系統立った慈善事業と組織化された自助（A.G. ウォーナ）

ところで、大学拡張が民衆の高等教育をめざす運動であることはすでに述べた。しかし、それだけでは、アダムスが大学拡張の普及と実践にかくも深く、かつ

積極に関わった意図の過半はいまだ不問に付されたままである。アダムスの真意を理解するには、何のための民衆の高等教育かという問題が解明されねばならないだろう。こうした問題意識からすると、イギリス大学拡張を評して、「(それは) 富める者と貧しい者との反目を解消させるという面で、他のいかなる努力よりも成果をあげている」<sup>\*18</sup>と述べたくだけは注目に値する。そして、合衆国においても、「大学拡張は、上流階級と勤労階級との反目を解消し、労資双方の利害を調和させるのに役立つ。それは、無知な扇動にかわって知性を促進し、社会の諸問題についてのよりよき理解を促すだろう。」<sup>\*19</sup>と期待を表明している点を見逃してはならない。アダムスが、社会における反目や対立、あるいは敵対の調停および解消に大学拡張の目的を見いだしていたことは論をまたない。

さらに、ボルチモア市内の女子労働者の学習実態を考察した論稿を読むと、興味深くだりに出合う。彼は、冒頭で「生産的な協同組合をつくらうとする、労働者階級のがわでの試みのほとんどが失敗してきた原因は、彼らの無知と運営の不味さにある」と断じたうえで、「労働者が、教育および理性の命ずるところではなく、扇動や発作的な組織化に自らを委ねつづけるかぎり、致命的な過誤は今後も繰り返されるだろう。」<sup>\*20</sup>と警鐘を打ち鳴らしている。

一般に「民衆の高等教育」と言うとき、その対象には、富める者も貧しい者も、資本家も労働者も包摂する。しかし、すでにみたように、アダムスは、社会の秩序ある調和的な発展にとって、労働者階級の教育こそが急務とみなしていた。したがって大学拡張の対象として彼の念頭にあったのは、まぎれもなく労働者階級であった。

しかも、大学拡張が社会における反目、対立、敵対の調停および解消を意図するものである以上、労働者の不満を煽るような内容は、拡張教育としては妥当性を欠く。彼が、真の教育と称して重視したのは、労働者階級の精神的ないし道徳的向上に資するものである。それが、教養教育であったことは論をまたない。その意味では、大学拡張の実施をアダムスに委任することを決意したものの、いまだ工場主の息子の脳裏を横切るコース内容についての不安は杞憂にすぎなかった。<sup>\*21</sup>

大学拡張の啓蒙および普及にアダムスの果たした役割ははかりしれない。1891年の初頭には、遠路ウィスコンシン州まで出向き、歴史協会でも大学拡張の歴史的意味を論じるとともに、同州での実践を鼓舞しているのである。<sup>\*22</sup>そこからすると、事業そのものに直接関わった例は意外に少ない。それだけに、「労働者階級の発展」では、アダムス自身、率先してコースの編成に

あたり、しかも初回の講義を自ら担当したことは異例と映る。そうした熱の入れようは、同コースが専ら工場労働者を対象に想定して発案され、労資の協調のもとで事業の展開が企図されていたこととけっして無縁ではなからう。

## アダムスの大学拡張構想

1872年9月号の『Popular Science Monthly』に掲載された「科学の素人 (Scientific Dabblers)」と題する論稿は、民衆のための科学的知識の普及をめぐる当時の状況とそこに内在する問題を明快に指摘している。

「科学的なトピックスを扱い、今日流布している通俗講演は浅薄で無益である：神学者は、しばしば宗教的な目的のために科学を誤り伝える；新聞は、役にも立つが、ほとんどの場合、科学に無知な人びとによって経営されている。民衆は知識を求め、そして知らず知らずのうちに、小麦の混じった粗穀を与えられているようなものだ。ある点では、民衆の精神は、ばかばかしい迷信で満たされている。」<sup>\*23</sup>論者のクラーク (F. W. Clarke) は、「民衆の科学 (popular science)」と呼ばれても、その多くが「科学」の名に値しないと論難し、それは、提供者たる聖職者および新聞がそもそも科学の素人であることに起因すると断じた。彼が心に思い描いていたのは、ファラディ、ティンダル、ハクスレイといった科学者であり、研究の成果をすすんでポピュライズしようとする実践であった。とすれば、クラークが、似非科学者になり代わって、すぐれた思索家や観察者、つまり本物の科学者の登場を希求したとしても不思議ではない。

高度な民衆教育に大学の果たす役割を論じたという意味においては、1879年10月30日の『Nation』誌に掲載された投稿論文は注目に値する。ニューヨーク在住の読者から寄せられたそのエッセイ(「都市部カレッジのためのひとつの提案」)では、フンボルトアカデミーを取り上げ、著名な大学教授が民衆に連続講義を提供し、1877年度には800人もの受講生を集めた事実が報告されている。論者は、同アカデミーの実践に、「受けを狙って内容を希薄化する (“popular” dilutions)」ことなく、学究的な講義を民衆に提供する可能性を見いだしていた。続けて彼は、アメリカの大学もドイツの大学が実施してきたと同様な実践に着手すべきことを提案して、次のように述べている。

「自国についてもっと真剣に考えることの大切さを人びとに認識させるのは、大学の責務である。民衆の道義心はほとんど墮落し、また外国から持ち込まれた

風紀紊乱の思想——私は、労働党の乱暴な理論のことを言っているのだが——がわが国の社会および政治を危機に陥れようとしているとき、大学は、できるだけ多くの人びとのあいだに学習への熱意と教養に対する正しい認識を啓培し、そして包容力のある、高貴で敬虔なアメリカ人の思想を発展させる義務を負う。わが国の大学(colleges)は、ドイツの大学(universities)が自国のためになしてきたことを、合衆国のために遂行しなければならない。\*24 雑誌に掲載されたこれらの論稿から、すでに1870年代には、既存の民衆教育に飽き足らず、その改善充実が必要とする認識は識者の間に芽生え、また民衆教育の刷新という面から大学への期待も高まりをみせていたことがわかる。とはいえ、民衆教育のための新たなスキームはいまだ提示されるにはいたっていない。

アダムスが没した翌年の1902年に刊行された追悼集によると、生前彼は、ジークフリート(Jules Siegfried)の言説から引用して「民衆の教育が、民主主義の最初の任務である。」を座右の銘にしていたといわれる。\*25 そうであってみれば、イギリス大学拡張との邂逅は、人智にてはかれざる冥数といっても過言ではなからう。

周知のごとく、大学拡張とは、民衆の教育需要と教育資源を供給する大学とをリンクしようとするスキームにはかならない。ただしその実施にあたっては、イギリスの場合、オックスブリッジの両大学のように自ら主体的に拡張事業を組織し、それを民衆に提供する方法と、ロンドン大学拡張協会のように、任意団体が近隣の諸大学と民衆との間に介在し、拡張事業の実施母体として機能する方法の2つがみられる。とすれば、アダムスは、いかなる構想をもって、大学と民衆とをリンクさせようと考えていたのであるか。当初より、彼が公共図書館に特別な思いを寄せていたことは確かである。アダムスがアメリカ図書館協会年次大会という機会を捉えて大学拡張を唱道したのは単なる偶然ではない。その証拠に、以後も、パフアローをはじめシカゴのニューベリー等の公共図書館に対して、陰になり日向になり拡張事業を推進するための支援活動を提供しているからである。

アダムスが公共図書館に着目した理由をさぐっていくと、折しも全国的な普及めざましい公共図書館が大学拡張事業を実施する上で必要な、図書、施設、人の3条件を具有していた事実に気づかされる。

本来、大学拡張コースにおける学習は12の連続講義と各講義の前後に行われる討論、課題論文の作成を基軸に展開される。そのうち、学習の主体的な発展と深化という面では、討論と課題論文が重要である。しかし、それらが所期の目的を果たすには、受講生たちが、

講義要目に示された参考文献をいつでも自由に読むことのできるような体制を要求する。そうした要請にうまく応えることができる機関といえば、図書館のほかにはなかった。さらに、この時期の公共図書館は、自らの役割を書籍の収集と管理と規定してきた旧図書館像から脱却し、民衆の教育に積極的に関わろうとしていたことも看過してはならないだろう。そうした情勢をうけて新設の図書館は、書架および閲覧室に加え、講義室を兼備するのが常態となりつつあった。実際、アダムス自身、ノーサムプトン公共図書館の建設に際し、300の座席をもつ講義室と50人を収容できるセミナー用の教室を計画に加えるよう助言している。\*26 図書館が、拡張講義コースを開講する上で格好の物的条件を有していたことは間違いない。

大学拡張にとって好都合な3つめの人的な条件は、図書館司書の専門職化の動向と関係する。アダムスも法律家や医者になぞらえて図書館司書を論じているように\*27、この時期、「世界中の智恵を集積した図書館を管理運営するには、高度で特別な訓練を要する」という考え方が定着しつつあった。高度で特別な訓練を受けた専門家であればこそ、図書館司書に対して、アダムスは、講師としての役割\*28と大学拡張事業を創始する際のオーガナイザーとしての役割を期待するのであった。

「公共図書館の司書は、教育を組織化することによって、民衆の高等教育を創始する人間である。彼は、あまたの協力を得ることができる。教師、牧師、知的な市民、若者からなる幹部会議を招集し、社会のすぐれた諸勢力を、セクトとか党派を超えたより高度なものへと結集させることができる。積極的な司書や彼のアシスタントは、若者たちによる運営委員会と一緒にあって、この高等教育事業を実施することができるはずだ。その事業は、市長とか地域の名士からの支持をとりつけることもできるはずだ。」\*29

組織ができあがり、そして必要経費を調達できる目処がつけば、いよいよ拡張講義コースを担当する講師が近隣大学から確保される。パフアローおよびニューベリーの両図書館をはじめ、なにがしかのかたちでアダムスがかかわった拡張事業は、概ねこうした段階を踏んで実施されている。そこでは、イギリス大学拡張の紹介論文で示した大学拡張運営委員会組織化のための手順が忠実に踏襲されている。

拡張事業は、それぞれの地域がイニシャティブをとって創始し、自助の精神を抛り所にして運営するように構想されていた。したがって、そうしたイニシャティブを発揮することが可能であれば、公共図書館に拘泥する必要はなかったわけである。地域住民を組織化する

る能力に長けた人間を擁し、その上、図書と講義室に適した若干の教室を有していたなら、大学拡張にとって格好の拠点となりえた。したがって、教会、YMCA本部、歴史協会や文学協会をはじめ、時として大学卒業生協会なども拡張事業の実施母体として機能しうると、アダムスは考えた。

それに引き換え、アダムスの大学拡張構想における大学の位置づけは驚くほど消極的で脆弱である。先述したように、アダムスが言うところの「需要と供給」の論理にしたがうなら、そもそも大学が率先して拡張事業を企画、実施することは考えにくい。大学側が講師を提供するとしても、それは、大学拡張に対する需要が明確に存在し、それへの対応というかたちをとらざるをえないからである。

そのあたりをアダムスの論稿で確認しようとするれば、1891年『フォーラム』誌に掲載された「アメリカにおける大学拡張」と題する論文が興味深い。

「巡回講義を担当するために、長い道のりを旅行するのは、大学教授の任務ではない。大学教授は、時に、大学拡張について紹介するための講義を行ったり、近隣地域でコースが組織されるのを手伝ったりすることもあろうが、巡回講義をするための人間ではない。本務とする活動は、まさに彼らの手元にある。もし自由な時間があれば、彼らはそれを独創的な研究か、さもなくば文字通り余暇に充てる。大学拡張講義を担当する常備のスタッフは、わが国のすぐれた大学において大学院の学生の中から養成されるべきである。学者を目指すそうした雛鳥たちには、巣立ちを試みる前に、巣のまわりで飛ぶことを教えるべきである。それが、ボルティモア、オックスフォード、ケンブリッジのやり方である。」<sup>\*30</sup>

いみじくもここには、大学拡張に対するアダムスの姿態が端的に表明されている。それは、まぎれもなく研究活動を重視する大学院大学とそこに在職する大学教授についての信条を強く反映したものであった。アダムス自身、拡張事業に直接手を染めることが少なかった理由はここにある。実際、ベミスにしてもアンドリュースにしても、また「労働者階級の発展」を担当した講師たちのほとんどが、大学院の学生であった。しかも、彼らは、各自の自発的な意志にもとづくあくまで個人的な活動として拡張講義を担当していたという事実を看過してはならないだろう。<sup>\*31</sup>

## 結びにかえて

アダムスが大学拡張に関わった14年間の論稿を通覧すると、それらの執筆時期は、1887年から1891年まで

と1899年から1901年までの2期に分けられる。第一期の特徴は、表題に「大学拡張」を冠した論稿と「民衆の高等教育」と表記したものが混在しているところにある。<sup>\*32</sup> 一見無造作にみえるが、仔細に検討すれば、彼は2つのタームを意識的にかつ慎重に使い分けていることがわかる。

歴史学者らしく彼は、過去の実践をひもといた上で、「合衆国では、大学拡張という用語は耳目に新しいが、そのこと自体は古くからある。」と指摘する。そして、19世紀中葉にイェール大学シリマン教授がおこなった科学の連続講義やライシウムなどの例を挙げ、「それらは、名称こそ大学拡張とは呼ばれなかったが、大学拡張である。」と主張している。<sup>\*33</sup> 大学人による民衆教育という意味では、大西洋を挟んだ2つの国の実践は共通したかもしれないが、大学の主体的、組織的な関与という点で根本的に相違した。そのことをアダムスは明らかに認識していた。だからこそ、彼は、イギリスの実践もしくはそうした観点を念頭においた論稿では表題に「大学拡張」を掲げたが、合衆国の実践を論じる場合には意図的に「民衆の高等教育」というタームを選択したと考えられる。ともあれ、合衆国の大学拡張は、その端緒より、大学との組織的な関係を構築することを不問に付していた。ために、自らを根拠づける論理と事業が依拠し、またそれを安定的に運営するための基盤を欠いていた。拡張運動が広がりを見せるに伴って、「大学拡張」というまさしくその「誇張された呼称」に激しい批判<sup>\*34</sup>が浴びせられることになった原因も、そこにある。

他方、手ずから準備した連続講義「労働者階級の発展」であったが、アダムス自身「わずか控えめな成果をおさめただけであった」<sup>\*35</sup>と述懐して、失敗を認めている。そして「そうした労働者、さらにいうと“特定の社会的階級”に講義を行おうとすることは、大学人の過てる情熱である」と反省の弁を述べ、「大学拡張は、職業にかかわらず市民に対して行われるべきである。」と断じるのである。<sup>\*36</sup> こうした総括が1891年の論文でなされていることを考えあわせると、アダムスは、早い時期に労働者階級を対象に想定した大学拡張に見切りをつけていたといえるであろう。

さらに、各地の拡張事業が衰退を余儀なくされていく90年代後半の情勢も彼の論調にすくなくならぬ影響を及ぼした。その結果、第二期、つまり世紀転換前後に執筆した論稿で、彼は、大学拡張の来しかたを評し「所期の目的をかならずしも達成してきたとはいえない。」と消極的な見解を表明し、今後についても、「消滅しはしないだろうが」と、悲観的な心情を吐露している。もはや大学拡張には展望を見いだせないと判断した彼

が、それに代わる民衆教育の概念として持ち出したのが「教育拡張 (educational extension)」であった。絶筆となった論文「合衆国における教育拡張」には、大学拡張のみならずシャトーカ、夏期学校、通俗教育、音楽や芸術活動、博物館および歴史協会、新聞にいたるまで、民衆教育に資するじつに多様な機関や組織、教育方法が網羅されている。<sup>\*37</sup> 市民のための教育を包摂する概念として、彼が「教育拡張」をいかに広義に捉えようとしていたかをうかがわせる。奇しくもそれは、やがて今世紀に成立をみる「成人教育 (adult education)」の概念を髣髴させる。

だが、大学拡張の発展という意味では、アダムスの辿った論理とその帰着点は、本質的なところで限界を内包していた。たとえば、彼は、大学拡張運動の衰退の原因として、(1)適切な拡張講師の不足、(2)財政的支援の欠如、(3)すでに過重労働を強いられているのに、大学人が巡回講義で移動しなければならない旅程が大きいこと、(4)大学構内での本務のほうが必要かつ重要であること、(5)効果的で、安価な民衆教育の方法が開発されてきたこと、を指摘している。<sup>\*38</sup> 大学拡張をめぐる自然、社会、文化的な状況が視野におさめられていて、傾聴に値する。にもかかわらず、それらは、現象的にすぎて、内在的な原因に論及していないうらみは残る。一例を挙げると、原因の(1)に引き付けていえば、なぜ、適切な拡張講師が足りなかったのかということこそ考究すべき問題ではなかったか。

ベミスは、労働者階級の拡張講義コースへの参加が皆無か、参加してもその数はきわめて少ない事実を認めた上で、その原因についても論述している。それによれば、大学拡張が労働者階級にまで届いていない背景として、労働者の側に根深い不信感や排他性、階級意識があり、にもかかわらず提供者の側で、労働組合の代表との協議を怠ってきたため、労働者の疑念や頑なな意識を解きほぐすにいたっていないこと、コース内容の決定にあたって、労働者の要望を聞き入れていないこと、また講師は、労働者に好意的な態度をとるのをなおざりにしてきたこと、などを挙げている。<sup>\*39</sup> さすがに自らの経験をふまえた省察だけに具体性にとむ。さらに、合衆国ではイギリスほど歴史および文学への関心は高くないとの指摘も傾聴に値する。それからすると、アダムスが「上流階級と勤労階級との反目の解消」、「労使双方の利害の調和」を唱えたとき、勤労階級および労働者階級の既存の体制への順応、そのための懐柔を念頭にいていたことは自明である。しかも、拡張教育で志向したものが、中流階級の主に女性たちに人気のあったシャトーカの教養教育であってみれば、労働者との乖離は必定とみなされた。

1891年の時点で、彼は、イギリスとの社会文化的な相違を考慮して、合衆国では大学拡張の多様な実施形態や運営方法が試行されるべきことを唱道している。<sup>\*40</sup> 1901年の論文において、シカゴ大学の実践を高く評価しているのは、彼がハーバー (William R. Harper) 学長と昵懇であったという理由だけではない。他大学が行う実験には寛大にして真摯な態度で臨んだアダムスではあったが、如何せん、彼の大学観では、研究機能が圧倒的優位を占めた。大学が担うべき教育機能に関しては、研究成果をふまえた専門教育に行政官僚の養成を包含すべきことを唱えるのが精一杯であった。<sup>\*41</sup> そのため不特定多数の民衆教育となれば、大学機能として認知することはもとより、その種の教育に大学が積極的に関わることなど望むべくもなかった。このようにみてくると、合衆国に固有の大学拡張の創造は、自らを民衆と直接切り結び、民衆教育を担うべき正当な責務とみなす新しい大学観の成立を待たねばならなかった。

## 注

### Abbreviation

RCE: *U. S. Department of the Interior, Bureau of Education, Report of the Commissioner*  
JHUS: *Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science*

- (1) Herbert B. Adams, "Educational Extension in the United States." *RCE for the Year 1899-1900*. 1901, p. 299
- (2) H.B.Adams, "University Extension and Its Leaders." *The Review of Reviews*, Vol. 3, no. 18. July, 1891, p.602.
- (3) H. B. Adams, op. cit., p. 597.
- (4) 1815年から第一次世界大戦までの百年間にドイツに留学した学生数は、1万人を超える。留学先では、ベルリン大学がもっとも多く半数を占める。以下、ライプチヒ、ハイデルベルク、ハレ、ボン、ミュンヘン、ゲッティンゲンの大学が続く。  
アダムスは、1874年にドイツに留学し、1876年にハイデルベルク大学でPh.Dを取得している。
- (5) アダムスがイギリス大学拡張のことを知った経緯については、シャトーカのヴィンセントとか、ジョンズホプキンス大学で教鞭をとるイギリス人教師などの影響が考えられる。しかし、自著の論文でも伝記でも、そのことへの言及はみあたらない。
- (6) H.B.Adams, "University Extension in England." *JHUS*, 5th series, XI, 1887, p.29.



- (7) Ibid., p. 28.
- (8) Ibid., p. 30
- (9) Ibid., P. 31.
- (10) Ibid., p. 30.
- (11) Ibid., p. 27
- (12) これらを直訳すると、「協会」となる。しかし, societies および associations というタームでアダムスが表現しようとした組織は, 大学拡張の地方組織であり, 正しくは「地方センター」に相当する。「協会」と訳出してしまうと, ロンドン大学拡張協会などとの混同されるおそれがあるため, ここでは, 直訳を避けひとまず「組織」と表記することにした。
- (13) H. B. Adams, op. cit., p.30.
- (14) Ibid., pp. 29 - 30.
- (15) Ibid., pp. 21 - 23.
- (16) Edward W. Bemis, "Reminiscences of the Earliest University Extension in the United States." *The University Extension World*, Vol. 2, No. 5, November, 1893. p.172.
- (17) H. B. Adams, "Higher Education of the People; Recent Experiments in Baltimore." *The Independent*, July 7, 1888. p. 707.
- (18) H.B.Adams, "University Extension in England. ", *JHUS*, p32
- (19) H. B. Adams, "Seminary Libraries and University Extension." *JHUS*, p. 23
- (20) H. B. Adams, "Work Among Workingwomen in Baltimore." (Reprinted by permission from the Christian Union, June 6 and 13, 1889, with Comparative Statistics by Hon. Carroll D. Wright.) *Notes Supplementary to the Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Science*, No.9, 1889, p.3.
- (21) アダムスは, 若き経営者から依頼があったときの様子を次のように書き記している。「ウッドベリーではこれまで, ストライキは一度もなかった。彼は労働者のあいだに不満を喚起するような扇動的な教育を持ち込むことを望んではいなかった。もしも労働者の間で, 本当の教育, 精神的ないし道徳的な向上が推進されるなら, その実験がジョンズホプキンス大学関係者によって実施されることを彼は喜んだ。」H. B. Adams, "Higher Education of the People. Recent Experiments in Baltimore." *The Independent*, June 7, 1888. p.707.
- (22) H. B. Adams, "The Higher Education of the People." (An address delivered before the State Historical Society of Wisconsin, January 28, 1891).
- (23) F. W. Clarke, "Scientific Dabblers." *The Popular Science Monthly*, 1, September, 1872, pp. 600.
- (24) "A Suggestion for Our City Colleges." *The Nation*, Vol. 29, No. 748, October 30, 1879. pp. 291.
- (25) H. B. Adams: *Tributes of Friends with A Bibliography of the Department of History, Politics and Economics of the Johns Hopkins University, 1876 - 1901*. The Johns Hopkins Press, 1902. p.37
- (26) H. B. Adams, "Seminary Libraries and University Extension." *JHUS*, 5th series, XI, 1887, pp. 27 - 28.
- (27) Ibid., p. 26.
- (28) アダムスは, 司書が担当する講義を「lecture」ではなく「talk」と記し, また, 大学から招聘した講師によるいわゆる大学拡張とは別個に論じていることから, 図書館主催の講義と訳出した。「有能な司書の指導のもとで, 図書館主催の講義 (library lectures) は, 労働と資本, 社会問題, 19世紀の歴史といった大きな主題について, 毎週1回, 合計12回の平易な講義 (plain talk) からなるコースではじめられるべきだ。」(H. B. Adams, "Seminary Libraries and University Extension." *JHUS*, 5th Series, XI, 1887, p.26.)
- (29) H. B. Adams, op. cit., p. 22.
- (30) H. B. Adams "University Extension in America." *The Forum*, July, 1891. pp. 518 - 19.
- (31) H. B. Adams, "Higher Education of the People." *The Independent*, June 7, 1888. p. 707.
- (32) 表題に「大学拡張」を冠した論稿は, 1887年の論文 ("University Extension in England.", "Seminary Libraries and University Extension."), 1891年の3論文 ("University Extension and Its Leaders." *The Review of Reviews*, Vol. 3, no. 18, July, 1891; "University Extension in America." *The Forum*, Vol. XI, July, 1891; "American Pioneers of University Extension." *Educational Review*, 2, October, 1891.), そして1900年の論文 ("University Extension in Great Britain." *RCE for The Year 1898 - 1899, 1900*) である。
- (33) H. B. Adams, "American Pioneers of University Extension." *Educational Review*, 2, October, 1891. p.220, p.230.
- (34) 大学拡張批判は, 1892年から1893年にかけて展開された。代表的なものとしては, 以下のものが挙げられる。Charles W. Super, "Some Pros and

- Contras on University Extension." *The Atlantic Monthly*, No.70, March, 1892; Albert B. Hart, "University Participation, A Substitute for University Extension." *Educational Review*, Vol.6, June, 1893.
- (35) H. B. Adams, "University Extension in America." *The Forum*, Vol. XI, July, 1891. p. 515; H. B. Adams, "Public Educational Work in Baltimore." *JHUS*, Series X VII, No. 12, December, 1899. p.12.
- (36) Ibid.
- (37) H. B. Adams, "Educational Extension in the United States." *RCE for the Year 1899- 1900*. 1901, p. 305.
- (38) H. B. Adams, "Educational Extension in the United States." *RCE for the Year 1899 - 1900*, 1901.
- (39) Edward W. Bemis, "University Extension among Wage - Workers." *University Extension*, Vol. 4, No.4, October, 1894.
- (40) H. B. Adams, "University Extension in America." *The Forum*, Vol. XI, July, 1891, p. 523.
- (41) H. B. Adams, "The Promotion of Higher Political Education." *RCA for the Year 1885 - 1886*. 1887; H. B. Adams, "Defence of Civil Academy." *Science*, 9, May 20, 1887.